「ヴェーバー・パラダイム」をめぐる諸問題

田中紀行

はじめに

マックス・ヴェーバーの著作は社会科学、ことに社会学の世界では最も重要な古典としての評価を確立して久しく、その正典（カノン）としての地位はゆるぎないものとなっている。またヴェーバー研究にはドイツ語圏・英語圏を中心に膨大な蓄積があり、とりわけドイツでは「ヴェーバー解釈産業」と揶揄されるほどの活況を呈しているほか、日本においてもヴェーバー研究にはドイツ人研究者によって浩瀚な研究史（Schwentker, 1998）が書かれるほどの実績があることは周知の通りである。

自身もヴェーバー研究者であるディルク・ケスラーは数年前にドイツにおけるヴェーバー受容史について知識社会学的観点も交えて批判的考察を行なった際、第二次大戦後のドイツにおけるヴェーバー受容の特徴として、第一にヴェーバー個人へのパーソナルな関心と彼の普遍史的構想への関心が強いあまり、ヴェーバーの著作の社会学的内容に目を向けることが二の次になってしまう傾向、第二にヴェーバー受容が著しく選択的であって、ヴェーバーが法律家・農業史家・経済学者・宗教学者・文化史家・社会学者・哲学者・政治家等々に部門分けして扱われるために、その包括的理解がますます困難になっていることを挙げている（Kaesler, 2002: XVf.）。ケスラーはまた、ハーバーマスの『コミュニケ

ーション的行為の理論』(Habermas, 1981) 以後、現代の社会学理論研究者によってヴェーバー研究の文献が参照されることがなくなり、その結果、現在の社会学にとってヴェーバーの理論的レリヴァンスは全体としてわずかなものでしかなくなっているとも述べている (Kaesler, 2003: 149f.)。

これらの指摘はドイツのみならず、というよりそれ以上に、日本におけるヴェーバー受容によく当てはまるように思われる。日本におけるヴェーバー研究の進展は「ヴェーバー学」の確立をもたらしたものの、その成果をヴェーバーの現代的有効性という観点から検討する、あるいはヴェーバーの解釈にとどまらずヴェーバーの社会理論を体系的に再構成することによっていわば現代化するといった試み[1]は、これまで必ずしも十分に行なわれてこなかった。さらにいえば、現在の日本ではヴェーバーの専門的研究が現代の社会学理論の研究から切り離されて行なわれ、ヴェーバー研究といえば単なる学説史的研究としか見なされなくなる傾向がますます強くなってきているのではないか。このことはまた、近年わが国でヴェーバー研究を継承する若手研究者が少なくなりつつあることとおそらく無関係ではあるまい。日本の場合、総じてヴェーバー研究においてこれまで社会学者の果たしてきた役割が、経済史・法制史・政治学等の研究者のそれに比べて相対的に小さかったうえ、(社会学者のなかでさえ) 思想史的・個人史的な研究関心が強く、ヴェーバーの中に社会学者というより思想家を見出し、歴史哲学的な洞察や時代診断を読み取ろうとする関心が優位に立ってきたように思われる。

他方、海外の研究動向を見ると、この数年間にヴェーバー的な社会理論に固有の方法論やパースペクティヴを体系的観点から一つの「パラダイム」として再構成する研究や、それを現代の社会理論 (合理的選択理論、批判理論、世界システム論など) と比較しつつ再評価する研究がドイツを中心にして目立つようになってきている。ドイツでも英語圏でも今やヴェーバー研究と社会学理論の研究との交流は——少なくとも日本と比べればかなり——活発に行なわれているように見受けられる。ヴェーバーを単なる古典にとどまらず、現代の社会理論と対話しうる、いわば現役の理論家とし

て――あるいは少なくともそこから新しい理論を構築しうる有効な理論的源泉として――研究しようという動きが生まれており、その意味でケスラーの診断は必ずしも妥当とはいえなくなりつつあるようである。

この研究動向を端的に表現した「ヴェーバー・パラダイム（das Weber-Paradigma）」という用語は、これをタイトルに冠したゲルト・アルバート他編の論文集『ヴェーバー・パラダイム――マックス・ヴェーバーの研究プログラムの新展開に関する研究』（Albert et al. [Hg.], 2003）に由来し、同書刊行以来ドイツのヴェーバー研究者の間で用いられている。同書は「ヴェーバーの思考を他の科学的パラダイムと並んで自立的かつ生産的な接近方法として確立されうるような『パラダイム』として浮き彫りにすることは可能か？」（Ibid.: 2）という問題をめぐって二〇〇三年四月にハイデルベルクで開催されたコロキウムをもとに編集された論集である。ただし、「ヴェーバー・パラダイム」の内容についてはまだ統一的見解があるわけではなく、むしろ、ヴェーバー的なアプローチの体系的再構成と現代化をめざす立場にとっての標語として用いられているように見える。(2)

本稿では、ドイツを中心とした海外におけるヴェーバー研究の若干の新しい動向について概観した後、そのなかでも特に「ヴェーバー・パラダイム」構築の試みについて検討し、そのうえで社会学者としてのヴェーバー継承の今後の可能性について展望してみたい。(3)

一　近年のヴェーバー研究の動向――ドイツを中心に

最近十年余りのドイツを中心とした欧米のヴェーバー研究の動向をみると、まず何といっても目につくのは膨大な二次文献の蓄積である。とりわけ今世紀に入ってから刊行されたドイツ語のヴェーバー関係文献（翻訳を除く）は書籍に限っても少なくとも五十数冊にのぼり、二〇〇六年には実に十四冊も刊行されているのである。それらはヴェーバーの生涯に関する個人史的・家族史的・政治史研究(4)から、彼の思想と学問的業績に関する思想史・政治学・社会学・宗教

学・芸術学・歴史学等々の分野の研究、ヴェーバーの理論やアプローチを応用した経験的研究、さらにはアメリカ・フランス・日本・韓国等におけるヴェーバー受容史の研究にまで多岐にわたっている。こうした研究の進展の背景には、一九八四年以来刊行中の『マックス・ヴェーバー全集』(*Max Weber-Gesamtausgabe*) 編纂プロジェクトやヴェーバーの著作のCD－ROM化 (Weber, 1999) によって文献学的研究のための環境が整備されてきたことがある。また、英語圏でもヴェーバー研究論文の集大成 (Hamilton [ed.], 1991)、ヴェーバー研究の専門誌 *Max Weber Studies* の創刊（二〇〇〇年）、『ケンブリッジ必携』シリーズへのヴェーバーに関する巻 (Turner (ed.), 2000) の収録、ヴェーバー事典 (Swedberg, 2005) の刊行等、ヴェーバー研究にとって重要な出版が相次いで行なわれた。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』および『客観性』論文の刊行百周年にあたる二〇〇四年には、それらを記念するシンポジウムがいくつか開催され、そこから何冊もの論文集が生み出されたほか、『ベルリン社会学雑誌』(*Berliner Journal für Soziologie*)、『フランス社会学評論』(*Revue française de sociologie*) 等でヴェーバー特集号が組まれた。

このように欧米における近年のヴェーバー研究は量的にきわめて膨大であり、主要なものに限ってもその全体像を把握するのは難しい。[5] ただ、日本のヴェーバー研究と比較して、理論的体系化や他の社会理論との比較を志向した研究がコンスタントに生み出されていることは指摘できる。方法論、歴史社会学、宗教社会学、経済社会学、支配の社会学、都市社会学、音楽社会学といった個別分野ごとの体系的な解釈・評価と再構成 (Wagner und Zipprian [Hrsg., 1994; Kalberg, 1994; Kippenberg und Riesebrodt [Hrsg.], 2001; Hanke und Mommsen [Hrsg.], 2001) が試みられているだけでなく、ヴェーバー社会学の最も基礎的な理論と方法論に関する体系化が「ヴェーバー・パラダイム」の名のもとに試みられている (Albert et al. [Hrsg.], 2003; Schluchter, 2005; Albert et al. [Hrsg.], 2006; Lichtblau [Hrsg.], 2006)。またこれと関連して、他の社会理論（ジンメル、ルーマン、ハーバーマス、エリアス、フーコー、合理的選択理論など）との体系的比較と評価がしばしばテーマになっているが、これもヴェーバーの体系的理論家としての有効性や限界を評価

しようとする意図から行なわれている。ちなみに前述の『ベルリン社会学雑誌』特集号も、「ヴェーバー・パラダイム」なるものがはたして存在するのかどうか、存在するとすればどのように特徴づけられ、現代的見地から批判されうるのか、またそれは二十一世紀においても他のアプローチへの真のオールタナティヴなのか、現代的な「ヴェーバー主義（Weberianismus）」とはいかなるものなのかといった問いを軸に編集されていた（Müller, 2004: 435f.）。その際に検討される最も中心的なヴェーバーのテクストは、『経済と社会』、とりわけその「新稿」（第一次大戦後に書かれた諸章）の巻頭に置かれた「社会学の基礎概念」（Weber, 1972: 1-30）や『科学論集』（Weber, 1968）である。

従来、ヴェーバーの社会学的業績については、カヴァーされる対象領域の広さに加えて、『経済と社会』および『宗教社会学論集』という二つの主著がいずれも未完であるうえ、前者はヴェーバーが監修を委嘱されたシリーズ『社会経済学綱要』の一巻として書かれたという成立事情もあり、体系的・統一的把握の難しさが指摘されてきた。容易な統一的理解を拒むヴェーバーの多面性は一面では彼の魅力の源泉でもあって、表面的な統一性の欠如の背後に隠れたテーマの統一性や「真のヴェーバー」を探り出そうとする関心がこれまで多くのヴェーバー研究を動機づけてきたことも確かである。そこから（我田引水を含む）多様なヴェーバー解釈、たとえば行為類型論や合理化論にさまざまな基準を当てはめて再構成した研究や、彼の著作から読み取れる個々の洞察をヴェーバーの研究プロジェクト全体から切り離して「中範囲の理論」のレヴェルで経験的研究に応用する研究（官僚制論などはその典型であろう）が行なわれることにもなったわけである。ヴェーバーの著作がしばしば「採石場」に喩えられる所以である。

そうしたなかで、ヴェーバーの「パラダイム」がごく最近になってあらためてドイツの研究者の間で議論の焦点に浮上してきた背景としては、一つには社会学者ヴェーバーの体系的理解をそれまで強く規定してきたパーソンズの影響力が一九七〇年代以降次第に低下し、機能主義と社会進化論の枠組から自由にバランスのとれたヴェーバー像を構築すること（いわゆるヴェーバー解釈の「脱パーソンズ化」）が可能になってきた（Cf. Kalberg, 1994: 16f.［邦訳二四頁］; Swed-

berg, 2003: 299-301）という社会学界の変化があり、また一つには現代のさまざまな社会理論（ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論、ギデンズの構造化理論、ブルデューの文化社会学、合理的選択理論など）によってヴェーバーの理論的立場の「継承」が標榜され、ヴェーバー研究者にとってそれらとヴェーバー自身の本来の立場の異同を明らかにする必要が生じてきたといった事情があるようである。いわば社会学理論の多元的並存状況のなかでヴェーバーの現代的意義を問い直す作業が進められているのである。

二　シュルフターによる「ヴェーバー的研究プログラム」の提唱

「ヴェーバー・パラダイム」の探究には多くの研究者が関与しているが、「ヴェーバー・パラダイム」をめぐる現在の議論の発端となった前掲のアルバート他編の論文集（Albert et al. [Hg.], 2003）はM・ライナー・レプシウスとヴォルフガング・シュルフターに献呈されており、この二人が同書の巻頭にそれぞれの考える「ヴェーバー・パラダイム」ないし「ヴェーバー的研究プログラム」の特徴を解説した論文を掲載している。また、シュルフターの退官記念論文集『ヴェーバー・パラダイムの諸相』（Albert et al. [Hrsg.], 2006）でも彼の定式化した「ヴェーバー的研究プログラム」が各掲載論文の出発点になっていることから、一連の議論の中心にシュルフターが位置していると見て間違いないだろう。

シュルフターは『西洋合理主義の発展』[6]（Schluchter, 1979）以来、常に現代の社会学理論（とくにパーソンズ、ルーマン、ハーバーマス）との対話[7]を媒介させつつヴェーバー研究を進めてきた。彼のヴェーバー研究の特徴は、きわめて緻密なヴェーバーのテクスト解釈と作品史的連関の把握を踏まえながら、単なるヴェーバー「解釈（Interpretation）」にとどまらず、その「説明（Explikation）」にも踏み込んでおり、ヴェーバーから読み取り再構成した独自の社会学理論によって現代における理論研究にも寄与することをめざす点にあり、「ヴェーバーの問題設定には従うが、その解決

には必ずしも従わない」というスタンスが採られている（Ibid.: 14［邦訳二一頁］）。

彼が考える「ヴェーバー・パラダイム」（正確には「ヴェーバー的研究プログラム（das weberianische Forschungsprogramm）」）について、「社会学の基礎概念」や方法論に関するヴェーバーの著作を主要な典拠としながら初めて体系的に論じたのは前述の二〇〇三年のコロキウムへの提出論文「行為、秩序、文化――ヴェーバー的研究プログラムの基本特徴」（Albert et al.［Hg.］, 2003: 42-74. Schluchter 2005: 7-36 に巻頭論文として再録）においてである。[8] ここでは、「ヴェーバー的研究プログラム」がこれに対抗する他の研究プログラムと対置して位置づけられた上で、その構成要素が十のキーワードの列挙という形で解説されている。

シュルフターによれば、ヴェーバー的研究プログラムは哲学的背景との関連では「経済学的・社会学的ヘーゲル主義」としてのマルクスの、そして「社会学的カント主義」としてのデュルケムの研究プログラムに対置され、「カント化的社会学（kantianisierende Soziologie）」として特徴づけられるものである。デュルケムとヴェーバーは共にカント哲学を重要な出発点としながら、これをデュルケムが社会学によって置き換えたのに対して、ヴェーバーは社会学によって補完・拡張したというのである[9]（Schluchter 2005: 2）。現代の社会学理論の布置状況の中では、ヴェーバーの理解社会学の立場は、「規則に導かれた行為の理論（Theorie des regelgeleiteten Handelns）」として特徴づけられる。それは社会学理論をシステム理論／行為理論に大別した場合には後者に分類され、後者のなかでは意識哲学にもとづく「主観的に意味をもった行為の理論」として超越論的語用論にもとづくコミュニケーション的行為の理論（ハーバーマス）から区別される。さらに「主観的に意味をもった行為の理論」の内部では合理的選択理論に代表される「効用計算的行為の理論」から区別される（次頁の図を参照）。こうしてルーマンに代表されるシステム理論、コミュニケーション的行為の理論、合理的選択理論の三つがヴェーバー的研究プログラムに対抗する最も重要な研究プログラムとして位置づけられる。他方ヴェーバーと同じ陣営にはシュッツ、ギデンズ、ブルデューらが含まれる[10]（Ibid.: 12）。このようにヴェ

ーバーの研究プログラムは行為理論を基本としているが、それにとどまらず、これに秩序理論・文化理論・方法論を加えたものが含まれる。

ヴェーバー的研究プログラムの構成要素としてシュルフターが挙げているキーワードは、①批判的合理主義、②理念型、③説明的理解、④発見（ホイリスティッシュ）的合理主義、⑤方法論的個人主義、⑥多水準分析、⑦成果志向と固有価値志向、⑧価値討議、⑨階級・身分闘争および秩序・組織闘争、⑩人格である。①～⑥は方法上の問題、⑦～⑩は基礎概念上の問題に主として関わるものとされる。それぞれについてシュルフターはおおよそ次のように解説している。

①「批判的合理主義」とはこの用語が通常意味するポパーらの立場のことではなく、エミール・ラスクの用語法に従って、前カント的な独断論的合理主義およびヘーゲルの流出論的合理主義から区別されるカントの立場をさしている。ヴェーバーはリッカートによる一般化的経験科学と個性化的経験科学の区別をそこに組み込むことによって、当時メンガーとシュモラーの間で行なわれていた経済学の方法をめぐる論争（「方法論争」）に決着をつけようとした。その際社会学は理論的考察様式と歴史的考察様式をともに用いる理解的・経験的な行為科学として規定される。②その行為科学のための概念構成が理念型であり、理念型を用いた解釈仮説は自然法則的仮説から区別される。③理解と因果的説明とは対立するものではなく、

図　現代社会学理論の布置状況（W・シュルフターによる）

基準	立場		共通項
1．システム-環境か 行為者-状況か	システム理論	行為理論	意味、相互主義、二重の偶有性、理解
2．超越論的語用論か 意識理論か	コミュニケーション的行為の理論	主観的に意味をもった行為の理論	発話・行為能力をもつ行為者 個人を生成させるものとしてのゲゼルシャフト結合およびゲマインシャフト結合 制度化　解釈　多水準的分析
3．実践（Praxis）か 制作（Poiesis）か	規則に導かれた行為の理論	効用計算的な行為の理論	格率に従った合理的選択行為 理想化

＊）実線の矢印は理論の枝分かれを，点線の矢印は理論の要素を組み込んでいることをさす．

(Schluchter, 2005 : 12)

社会学は主観的に思われた根拠（「動機」）を行為の原因と見なす。④発見的合理主義とは行為の説明において目的合理性および価値合理性を方法論的に重視する立場をさす。ただし、目的合理性と価値合理性の間には優劣の関係はない。⑤意味をもった行為をなしうるのは人間だけだが、社会学の説明対象は通例マクロ現象であり、方法論的個人主義とはマクロ社会的構造や過程の分析をミクロ水準に基礎づけつつ行なう立場をさす。⑥多水準分析とはマクロ水準の現象をミクロ水準の現象と結びつけて説明しうる理論的枠組をさし、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』における説明モデルが（合理的選択理論におけるその図式化を批判しつつ）その範例として取り上げられる。⑦行為志向は成果志向と固有価値志向に二分されるが、それぞれ技術的規則と規範的規則に従うため相互に還元不可能である。同様に目的合理性と価値合理性もそれぞれ合理性の独自の次元をなす。この観点が「効用計算的行為理論」からヴェーバーの研究プログラムを区別する。⑧「価値討議」は行為者の自己反省を促進することにより、成果志向と固有価値志向それぞれの合理化を媒介する。⑨「社会学の基礎概念」において、社会関係に関しては「闘争」の観点が中心的位置を占めており、闘争は垂直的（階級と身分）にも水平的（秩序と組織）にも生じる。こうした概念装置は社会的不平等を歴史的観点から分析する際に有効である。また、そこでは「社会」概念より「秩序配置（Ordnungskonfiguration）」の概念の方が適切であろう。⑩こうしたさまざまな垂直的／水平的闘争の結果、特定の（生活態度やエートスを備えた）人間類型が淘汰される。この問題をヴェーバーは比較歴史社会学的に探究したのである。

シュルフターによる以上のような定式化は、ヴェーバー的研究プログラムの最も基本的な構成要素を抽出したものであって、その全てを描き出したものとはいえないだろう。彼が他の論文で論じたいくつかのテーマ――比較と発展史の関係、歴史において理念が作用する様式、価値自由など――もその一部だとシュルフター自身が明言している（Ibid.: 3）ことからもそれは明らかである。ここでシュルフターが体系化を試みたのは主としてヴェーバー理解社会学の方法論的立場であって、その解釈自体に特に異論はないが、実質的な社会学理論（彼の整理に従えば、行為理論・秩序理

論・文化理論）における「ヴェーバー的なもの」の特質は十分に解明されていないのではないか（特に文化理論に関しては何も述べていない[11]）。また後者に関しても、ほとんど「社会学の基礎概念」を典拠にしているためにかなり内容が乏しくなっている観は否めない。『経済と社会』をはじめとするヴェーバーの著作に含まれる体系的内容を研究プログラムとして再構成する作業がまだ残されている。そして何よりも、シュルフターの挙げる十の概念の意味内容とそれら相互の結びつき方が決定的に重要であると自身で述べている（Ibid.: 13）にもかかわらず、それらがいかなる仕方で結合しているのか、また別の形で結びつけられた場合にそこからいかなる研究プログラムが導かれるのかが十分に明示されていない。

とはいえ、シュルフターの挙げたキーワードはいずれもヴェーバー社会学にとって中心的な意義をもつ要素にはちがいない。⑤方法論的個人主義と⑥多水準分析はいわゆるミクロ―マクロ問題に関するヴェーバーの立場を示すものとして重要である。また⑦の成果志向と固有価値志向の区別は目的合理性に一元化できない包括的な合理性概念を要請し、社会学の功利主義的伝統から一線を画すものである。⑨「階級・身分闘争および秩序・組織闘争」の観点は機能主義に対抗する闘争理論のパラダイムとの親和性を示している。最後に⑩「人格」は、ヴェーバーの最終的認識関心がさまざまな社会的条件のもとでの諸勢力の闘争の結果として最後に生き残る人間の質の問題にあったことを示唆する。

三　ヴェーバー継承のさまざまな試み

シュルフターの考えるヴェーバー的研究プログラムは、長年にわたってヴェーバーを研究してきた専門家によって詳細な文献学的知識に立脚しつつ構成されたものであるが、他方では専門的ヴェーバー研究者ではなく社会学理論の構築に関心をもつ研究者によるヴェーバーの独自の解釈と継承も行なわれている。パーソンズの『社会的行為の構造』やハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』、リヒャルト・ミュンヒの『行為の理論』（Münch, 1982）などを初

めとして、さまざまな立場（機能主義、闘争理論、批判理論など）からヴェーバーを受容して（デュルケムらの異質な理論的伝統と統合したうえで）自らの理論の基盤にすることは過去にも試みられてきたが、最近この種の研究として注目されるのは、合理的選択理論の立場からヴェーバーをこの理論の先駆者として捉え直そうとする解釈である。[12]

このテーマに最も本格的に取り組んだのがゼノナス・ノルクスの『マックス・ヴェーバーと合理的選択理論』[13]（Norkus, 2001）である。同書でノルクスはヴェーバーの理解社会学の構想を明らかにした後、それとヴェーバーの実質的研究および合理的選択アプローチとの関係を検討し、さらに行為の合理性の問題と行為の類型論、ヴェーバーの中心問題と彼が見なす合理的資本主義の成立に関する説明といったテーマを合理的選択理論の観点から検討している。ヴェーバーの理解社会学は方法論的個人主義や目的合理的行為に置かれた発見的なプライオリティといった基本的特徴から合理的選択理論のグループに属するものの、ゲーム理論等の経済理論上の前提を現代の合理的選択理論とは共有していないことから、グループの中ではマージナルな位置しか占めていないと評価される（Ibid.: 187ff.）。ノルクスの試みがどこまで成功しているかはともかく、彼がヤン・エルスターらによって提唱される「分析的マルクス主義」にならって「分析的ヴェーバー主義（analytischer Weberianismus）」[14]を本書によって基礎づけようとしていることはヴェーバー受容史の観点からも興味深い。ただ一般的にいえば、合理的選択理論をヴェーバーの後継者として位置づけるには、とりわけシュルフターの強調する行為の二重の合理性（目的合理性と価値合理性）が前者の立場から正当に扱いうるのかどうかという問題が残されているように思われる。[15]

前述のシュルフターのキーワードを用いるなら、合理的選択理論によるヴェーバー・パラダイムの読み替えは「社会学の基礎概念」を主要な典拠としつつ④発見的合理主義、⑤方法論的個人主義、⑥多水準分析に着目することによって行なわれたものといえよう。これ以外の要素に重点をおいた全く異質なヴェーバー継承の戦略としては、ブルデューによるヴェーバー宗教社会学の読み替え（Bourdieu, 1971, 2000）が重要である。[16]ブルデューは社会科学における主観主義

と客観主義の二律背反を克服するという関心から独自の理論構築を模索する過程でヴェーバーの宗教社会学に出会い、特に『経済と社会』旧稿の「宗教社会学」に含まれる宗教的行為者（呪術師・祭司・予言者・平信徒）間の相互作用の分析に着目し、そこに（経済的利害関心に還元できない）固有の利害関心にもとづいて成立し世俗的社会から相対的に自立した「宗教界」の理論を読み取った。彼はこれをさらに「場（champ）」の理論へと一般化することでヴェーバー的アプローチを構造主義的アプローチと接合したのである。その際に継承されたヴェーバー・パラダイムの要素のなかで特に重要なのは闘争理論（シュルフターのキーワードでは⑨）であろう。ヴェーバーの仕事は「宗教の経済学」であり「宗教事象の唯物論的分析」であるとの発言（Bourdieu, 1987: 63［邦訳、八二頁］）にも見られるように、ブルデューはヴェーバーから利害闘争の展開する場（市場）として宗教界内部のダイナミズムを分析する視角を引き出し、さらにこれを文化生産（文学・芸術・学問など）の世界の社会学的分析にも応用できる形に一般化した。ブルデューの「場」の理論は『世界宗教の経済倫理』「中間考察」で展開されているヴェーバーの「価値領域（Wertsphären）」ないし「生活秩序（Lebensordnungen）」の概念を発展させたものと見ることもできる。

重要なことは、ここでは利害関心が経済的なそれに一元化されず、各々の「場」に固有の利害関心ないし「賭け金」が存在すると想定されていることである。宗教界の場合でいえば、宗教的正統性（あるいは宗教的権力の正当な行使）の独占がそれにあたる。ブルデューはこの利害関心の多元性を強調することによって、ヴェーバーの利害関心によって動かされる人間行為の捉え方（Weber, 1920：［邦訳、五八頁］）を前面に押し出しながらも、社会学の功利主義的伝統（合理的選択理論も含まれる）から一線を画す立場に立つ。他方、行為の合理性に関してはブルデューはヴェーバーの発見的（方法論的）合理主義を共有せず、伝統的行為に戦略的プライオリティを置いた慣習行動（pratique）とハビトゥスの概念を自らの理論の中核に据えていることは周知の通りである。この点でも彼の立場は合理的選択理論と明らかに対立する。また価値合理的行為は（宗教的、芸術的などの）非経済的利害関心を動機とする行為として捉え直されて

いるようである。「価値」のカテゴリーが多元化された「利害関心」のカテゴリーに吸収されていると言ってもよい。

以上の二つのヴェーバー継承の試みは全く対照的であり、いずれもヴェーバーの理論やアプローチに含まれる特定の要素を選択的に受容し展開したものである。ヴェーバーの中にはそれだけ複雑で相互に異質な要素が含まれているということであろう。これら以外にも多様な受容のパターンがありうるし、他のさまざまなパラダイムないし社会学的伝統との統合が今後も試みられると予想される。ここで想起されるのは、正統的マルクス主義の凋落にもかかわらず他の社会理論と融合した多様なマルクス主義（フランクフルト学派、構造主義的マルクス主義、分析的マルクス主義など）の展開によってマルクスの古典としての生命力が証明されてきたことである。ヴェーバーにも同様のことが生じつつあるのではないだろうか。ただヴェーバーの場合、もともと「ヴェーバー主義」や「ヴェーバー学派」といった明確に規定された理論体系や学派が存在せず、その著作の解釈が特定の枠にはめられて制約される度合いもはるかに低かったわけだが、ヴェーバー自身は社会科学諸分野における正統派（オーソドクシー）としての地位が確立されていた。異なるパラダイムの信奉者がヴェーバーをその先駆者として位置づけようとする動きは、それによって学界における自らの正統性を確保しようとする動機によって部分的に説明できるかもしれない（Cf. Kaesler, 2002: XVII）。

他方、前節で触れた「ヴェーバー・パラダイム」の内容を確定しようとする研究動向は、ヴェーバー解釈における正統派（「ヴェーバー主義」）確立につながる可能性もある。しかし、シュルフターの一連の仕事やこれまでのさまざまなヴェーバー受容の経緯を見る限り、ヴェーバーの社会学理論内部の複雑性に正当な配慮を払いつつ同時にそこから首尾一貫した「パラダイム」を構築する作業はかなり困難であり、「パラダイム」構築に際してはいずれにせよ何らかの取捨選択は避けられないのではないか――あるいは、「パラダイム」といってもかなり緩やかなものにならざるをえないのではないか――という印象が強い。逆にヴェーバーのテクストに忠実であろうとすれば、部分的な体系化に甘んじるしかないのではないか。シュルフター自身も認めているように、「研究プログラムは自己目的ではなく問題解決の指針」

であって、結局はその応用によって評価されるほかないものである（Schluchter, 2005: 4）が、経験的研究への応用がこれまでヴェーバーを「採石場」にしてきたこともまた事実である。

こうした困難を免れないにせよ、現在進められつつある「ヴェーバー・パラダイム」の再構成は、ヴェーバーの矮小化された受容や他のパラダイムによるヴェーバー受容に際しての恣意的な誤用を防止するためにも必要な作業である。ヴェーバーにおいてもマルクスの場合と同様に、異質な理論的伝統との統合によってもそのポテンシャルが発揮されうるとすれば、「ヴェーバー・パラダイム」研究と現代社会学理論の研究との協力が今後さらに求められるであろう。

注

（1）厚東（一九七七）はその数少ない例である。

（2）なお、その際「パラダイム」という用語は厳密な意味では使われておらず、「研究プログラム」と互換的に用いられている。

（3）以下では主として社会学理論の分野に限定してヴェーバー研究を論じるが、これはあくまで筆者の研究関心と能力の制約によるものであり、ヴェーバーを狭義の社会学者に還元するつもりはない。

（4）これらのなかには、マリアンネ・ヴェーバーのヴェーバー伝以来初めてといってよいヨアヒム・ラートカウによる一〇〇〇ページもの詳細な評伝（Radkau, 2005）のほか、ギュンター・ロートによるヴェーバーの祖先に関する研究（Roth, 2001）も含まれる。

（5）以下では、Kaesler（2002）、Kaesler（2003）、Swedberg（2003）を初めとする既存の研究動向のレヴューをいくつか参照した。

（6）同書は一九九八年にズーアカンプ社から再版された際に『近代合理主義の成立』（*Die Entstehung des modernen Rationalismus. Eine Analyse von Max Webers Entwicklungsgeschichte des Okzidents*）と改題されており、日本語訳のタイトルもこれによっている。

（7）同書にはこれ以降のシュルフターの著作に比べると全体としてパーソンズの影響が色濃く見られる。他方、とりわけハーバー

マスの『コミュニケーション的行為の理論』と『西洋合理主義の発展』とは、後者が前者の第一巻の草稿を参照しており、前者も逆に後者を引用するという形で相互に参照しあう関係にある。

(8) シュルフターが「ヴェーバー・パラダイム」ではなくラカトシュの用語を用いて「ヴェーバー的研究プログラム」という用語を用いているのは、さまざまな理論的枠組の多元的な並存状況を社会科学の常態と見なす立場から来ている。なお、二〇〇六年三月に京都大学で開催されたシンポジウム「マックス・ヴェーバーと現代社会――ヴェーバー的視座の現代的展開」(主催・京都大学大学院文学研究科)でメインゲストとして彼がおこなった基調報告はその一部にもとづくものであった。

(9) シュルフターによるこうした代表的古典理論の整理と再構成は、パーソンズとハーバーマスによる同種の先行研究(Parsons, 1937; Habermas, 1981)を強く意識して行なわれており、ごく最近になって『社会学の基礎づけ』(Schluchter, 2006)としてその第一巻が刊行された。ただし本書は今回は入手が間に合わず参照できなかった。

(10) ただし、前述の京都シンポジウムにおける発言によれば、ブルデューの位置づけについてはまだ確定していないということであった。

(11) ただし別の箇所でシュルフターはごく手短にヴェーバーの(彼自身は定義していない)「文化」概念の素描を「意味」と「価値」の概念を手がかりに試みている(Schluchter, 2000: 98f.)。ヴェーバーの理解社会学はリッカートのいう価値関係的科学であると同時に意味連関を中心的研究対象とするという特殊な意味における「文化科学」であるため、文化は重要な概念であるとされ、そこでは文化は人間生活の一領域ではなく一次元として扱われている。だがここでも「社会学の基礎概念」や『科学論集』が典拠になっているためか、その実質的内容は希薄なものにとどまっている。

(12) 近年におけるヴェーバー研究をレヴューして「ヴェーバー像の変貌」を論じたスヴェードボリも、合理的選択理論からのヴェーバー解釈を「伝統的ヴェーバー像に対する最もラディカルな挑戦」(Swedberg, 2003: 285)と評価している。

(13) 同書の内容に関してはシュルフターによる書評(Schluchter, 2005: 221ff.)を参照した。

(14) この用語自体はノルクスの発明ではなく、彼以前にエドガー・カイザーとマイケル・ヘクターによって使われている(Kiser and Hechter, 1998: 798)。

(15) ヴェーバー・パラダイムを方法論的個人主義ではなく「穏健な方法論的ホーリズム」として捉えることによって合理的選択アプローチから峻別しようとする解釈もある(Albert, 2005)。またこれに対する合理的選択理論からの批判として、Esser (2006)

を参照。

(16) スヴェードボリもベーンンズに代表される「伝統的ウェーバー像」とは異なる新しいウェーバー像として、合理的選択理論のそれと並んでブルデューの描くウェーバー像を挙げている（Swedberg, 2003: 299ff.）。なお、ブルデューによるウェーバーの選択的受容について詳しくは田中（一九九三）および Egger et al. (2000) を参照。

文　献

Albert, Gert, 2005: "Moderater methodologischer Holismus. Eine weberianische Interpretation des Makro-Mikro-Makro-Modells," in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 57 (3), 387-413.

Albert, Gert; Bienfait, Agathe; Sigmund, Steffen und Wendt, Claus (Hrsg.), 2003: *Das Weber-Paradigma. Studien zur Weiterentwicklung von Max Webers Forschungsprogramm,* Mohr Siebeck.

Albert, Gert; Bienfait, Agathe; Sigmund, Steffen und Stachura, Mateusz (Hrsg.), 2006: *Aspekte des Weber-Paradigmas. Festschrift für Wolfgang Schluchter,* VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Bourdieu, Pierre, 1971: "Une interprétation de la théorie de la religion selon Max Weber", *Archives Européenne de Sociologie* 12: 3-21.

———, 1987: *Choses dites*. Editions de Minuit.（石崎晴己訳『構造と実践』新評論、一九八八年）

———, 2000: *Das religiöse Feld. Texte zur Ökonomie des Heilsgeschehens.* (hrsg. von Stephan Egger u. a.) UVK Universitätsverlag Konstanz.

Camic, Charles; Gorski, Philip S. and Trubek, David M. (eds.), 2005: *Max Weber's* Economy and Society: *A Critical Companion,* Stanford University Press.

Egger, Stephan; Pfeuffer, Andreas und Schultheis, Franz, "Vom Habitus zum Feld. Religion, Soziologie und die Spuren Max Webers bei Pierre Bourdieu," in: Bourdieu (2000): 131-76.

Esser, Hartmut, 2006: "Eines für Alle(s)? Das Weber-Paradigma, das Konzept des moderaten methodologischen Holismus und das Modell der soziologischen Erklärung," in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 58 (2), 352-63.

Habermas, Jürgen, 1981: *Theorie des kommunikativen Handelns,* 2 Bde, Suhrkamp. (河上倫逸他訳『コミュニケイション的行為の理論』上・中・下、未來社、一九八五―八七年)

Hamilton, Peter (ed.), 1991: *Max Weber: Critical Assessments,* Routledge.

Hanke, Edith und Mommsen, Wolfgang J. (Hrsg.), 2001: *Max Webers Herrschaftssoziologie. Studien zu Entstehung und Wirkung*, Mohr Siebeck.

Kaesler, Dirk, 2002: "Vom akademischen Außenseiter zum sozialwissenschaftlichen Klassiker," in: ders. (Hrsg.), *Max Weber Schriften 1894-1922,* Alfred Kröner Verlag, VII-XXXVI.

———, 2003: "Neuere Schriften zur Max Weber-Forschung," in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* 55 (1), 136-51.

Kalberg, Stephen, 1994: *Max Weber's Comparative-Historical Sociology,* Polity Press. (甲南大学ヴェーバー研究会訳『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』ミネルヴァ書房、一九九九年)

Kippenberg, Hans. G. und Riesebrodt, Martin (Hrsg.), 2001: *Max Webers "Religionssystematik",* Mohr Siebeck.

Kiser, Edgar and Hechter, Michael, 1998: "The Debate on Historical Sociology: Rational Choice Theory and Its Critics," in: *American Journal of Sociology* 104 (3), 785-816.

厚東洋輔、一九七七、『ヴェーバー社会理論の研究』東京大学出版会。

Lichtblau, Klaus (Hrsg.), 2006: *Max Webers 'Grundbegriffe'. Kategorien der kultur- und sozialwissenschaftlichen Forschung,* VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Müller, Hans-Peter, 2004: "Editorial," in: *Berliner Journal für Soziologie* 14: 435-38.

Münch, Richard, 1982: *Theorie des Handelns. Zur Rekonstruktion der Beiträge von Talcott Parsons, Emile Durkheim und Max Weber,* Suhrkamp.

Norkus, Zenonas, 2001: *Max Weber und Rational Choice,* Metropolis.

Parsons, Talcott, 1937: *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers,* McGraw-Hill. (稲上毅他訳『社会的行為の構造』1～5、木鐸社、一九七六―一九八九年)

Radkau, Joachim, 2005: *Max Weber. Die Leidenschaft des Denkens,* Carl Hanser.

Roth, Guenther, 2001: *Max Webers deutsch-englische Familiengeschichte,* 1800-1950, Mohr Siebeck.

Schluchter, Wolfgang, 1979: *Die Entwicklung des okzidentalen Rationalismus. Eine Analyse von Max Webers Gesellschaftsgeschichte,* J. C. B. Mohr.（嘉目克彦訳『近代合理主義の成立――マックス・ヴェーバーの西洋発展史の分析』未来社、一九八七年）

――, 1988: *Religion und Lebensführung,* 2 Bde., Suhrkamp.

――, 1996: *Unversöhnte Moderne,* Suhrkamp.

――, 2000: *Individualismus, Verantwortungsethik und Vielfalt,* Velbrück Wissenschaft.

――, 2005: *Handlung, Ordnung und Kultur. Studien zu einem Forschungsprogramm im Anschluss an Max Weber,* Mohr Siebeck.

――, 2006: *Grundlegungen der Soziologie,* Bd. 1, Mohr Siebeck.

Schwentker, Wolfgang, 1998: *Max Weber in Japan. Eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte 1905-1995,* Mohr Siebeck.

Swedberg, Richard, 2003: "The Changing Picture of Max Weber's Sociology," in: *Annual Review of Sociology* 29: 283-306.

――, 2005: *The Max Weber Dictionary: Key Words and Central Concepts,* Stanford University Press.

田中紀行、一九九三、「文化生産の社会学――P・ブルデューのヴェーバー受容をめぐって」『研究年報』奈良女子大学文学部、第三六号、三七―五一頁。

Turner, Stephen (ed.), 2000: *The Cambridge Companion to Weber,* Cambridge University Press.

Wagner, Gerhard und Zipprian, Heinz (Hrsg.), 1994: *Max Webers Wissenschaftslehre. Interpretation und Kritik,* Suhrkamp.

Weber, Max, 1920: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie,* Bd. 1, J. C. B. Mohr.（大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房、一九七二年〔抄訳〕）

――, 1968: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre,* 3. Aufl., J. C. B. Mohr.

――, 1972: *Wirtschaft und Gesellschaft. Grundriss der verstehenden Soziologie,* 5. Aufl., J. C. B. Mohr.（阿閉吉男・内藤莞爾訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣、一九八九年〔第一部第一章の訳〕）

――, 1999: *Max Weber im Kontext. Gesammelte Schriften, Aufsätze & Vorträge,* Worm: InfoSoftWare.

（筆者　たなか・のりゆき　京都大学大学院文学研究科助教授／社会学）

until the Edo period (seventeenth through mid-nineteenth century), indicating a clear transmission of the *wayō* style. While there are still certainly aspects of a modified *wayō* that succeeded into later generations, rather than it being an artistic style limited to the middle and late Heian period, rather, it extended from the first half of the eleventh century and continued to exist within Japanese sculpture for many centuries afterward. By this definition, it is possible to clearly situate *wayō* as a distinctive Japanese sculptural style.

Über einige Probleme des "Weber-Paradigmas"

by
Noriyuki TANAKA
Associate Professor of Sociology
Graduate School of Letters
Kyoto University

In jüngerer Zeit entwickelt sich in der ausländischen, insbesondere deutschen Sekundärliteratur zu Max Weber ein Interesse an einer Rekonstruktion der Methodologie und Perspektive der Weberschen Soziologie als ein "Paradigma" in systematischer Absicht, sowie an einer Überprüfung deren Bedeutung mittels Vergleiches mit gegenwärtigen Sozialtheorien (z. B. Rational Choice-Theorie, kritischer Theorie und Weltsystemtheorie). Im vorliegenden Aufsatz werden, nach einem Überblick über die neuen Tendenzen in der Weber-Forschung, neuere Versuche zur Rekonstruktion des "Weber-Paradigmas" und zur Integration der Weberschen Soziologie in andere Sozialtheorien überprüft.

Wolfgang Schluchter, der eine Zentralfigur der Forschung zum "Weber-Paradigmas" ist, bezeichnet Webers verstehende Soziologie als eine "Theorie des regelgeleiteten Handelns" und verortet sie in der Konstellation der gegenwärtigen Sozialtheorien. Obwohl er die Bestandteile des "weberianischen Forschungsprogramms" in zehn Stichworten formuliert und erläutert, ist es noch unklar, wie diese Bestandteile miteinander verbunden sind.

Eine der bemerkenswertesten Tendenzen in der neueren Weber-Rezeption in der soziologischen Theorie ist der Versuch, die weberianischen Ansätze in die RC-Theorien zu integrieren. Er beruht auf eine spezifische Weber-Interpretation, die den "heuristischen Rationalismus," den "methodologischen Individualismus" und die "Mehrebeneanalyse" (mit Schluchters Stichworten) im weberianischen For-

schungsprogramm in den Vordergrund rückt. Eine gegensätzliche Art der Weber-Rezeption stellt Pierre Bourdieus Kultursoziologie dar, die die Vielfältigkeit der "Interessen" und den konflikttheoretischen Ansatz bei Weber betont. Die beiden Arbeiten sind Beispiele der selektiven Rezeption der bestimmten Elemente in der Weberschen bzw. weberianischen Ansätze.

In diesem Überblick stellt sich heraus, dass eine konsequente Rekonstruktion des "Weber-Paradigmas," die gleichzeitig die Komplexität im Weberschen Werk berücksichtigt, ziemlich schwierig ist, so dass eine solche Arbeit mehr oder weniger selektive Rezeption der Weberschen Ansätze nicht vermeiden kann.

Towards an Essentialistic Theory of Dispositions

by

Daisuke KAIDA

Department of Philosophy
University of Durham

Elizabeth Prior advanced a theory of dispositions which is still considered to be an orthodox view. The theory has two central theses: (1) dispositions must have causal bases (Causal Thesis); (2) we cannot make any identification of dispositions and causal bases (Distinctness Thesis). These two theses, in combination, bring about a consequence that dispositions are causally impotent (Impotence Consequence). If we accept a plausible tenet that to be real is to possess causal powers, it follows then that dispositions are not real properties. This should be unpleasant even for Prior, as she explicitly commits herself to disposition realism.

I try to avoid Impotence Consequence by attacking Distinctness Thesis. Prior presented three arguments for Distinctness Thesis. The first argument relies on the empirical plausibility that a disposition could be multiply realized by various causal bases in various objects. The plausibility of this argument, however, draws on ambiguity about ontology of higher order properties. I offer an ontology of properties, which has particularistic characters and allows us to identify dispositions with their causal bases.

Prior's second argument points out that some manifestations of dispositions could be blocked by other properties of the same bearer. This argument, however, overlooks the fact that dispositions need their 'reciprocal partner' dispositions for their manifestations.